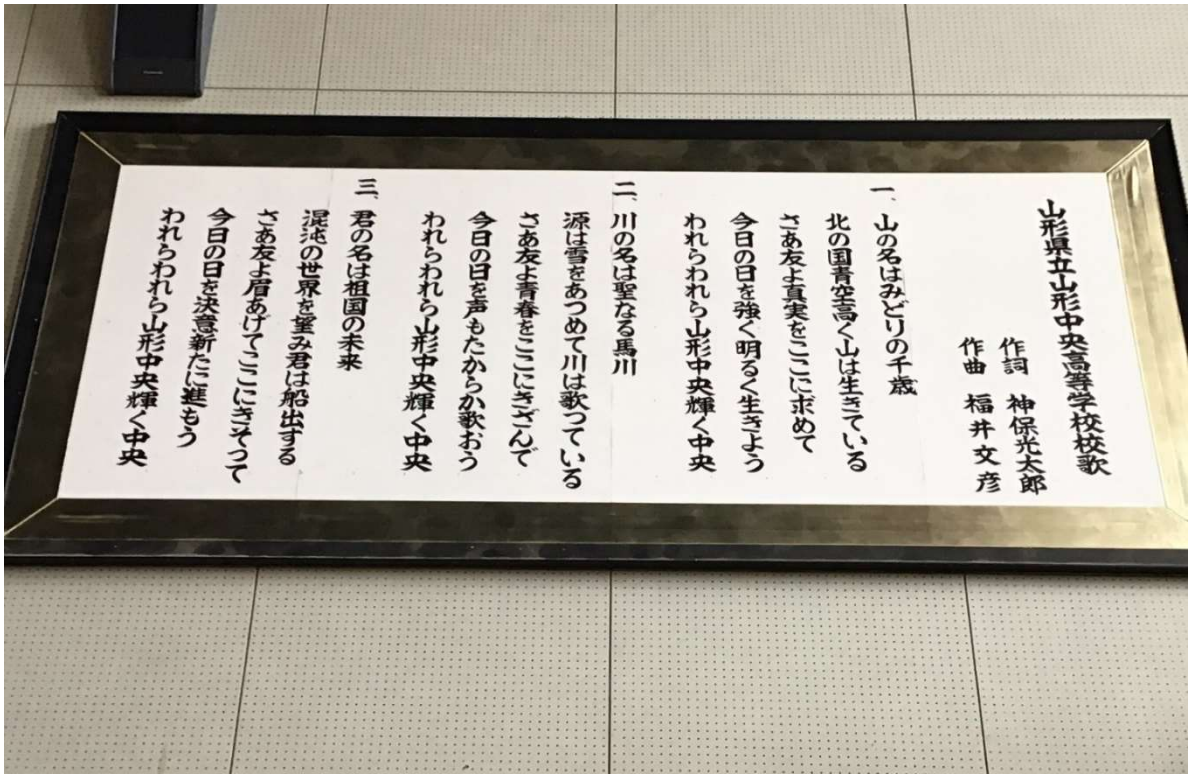
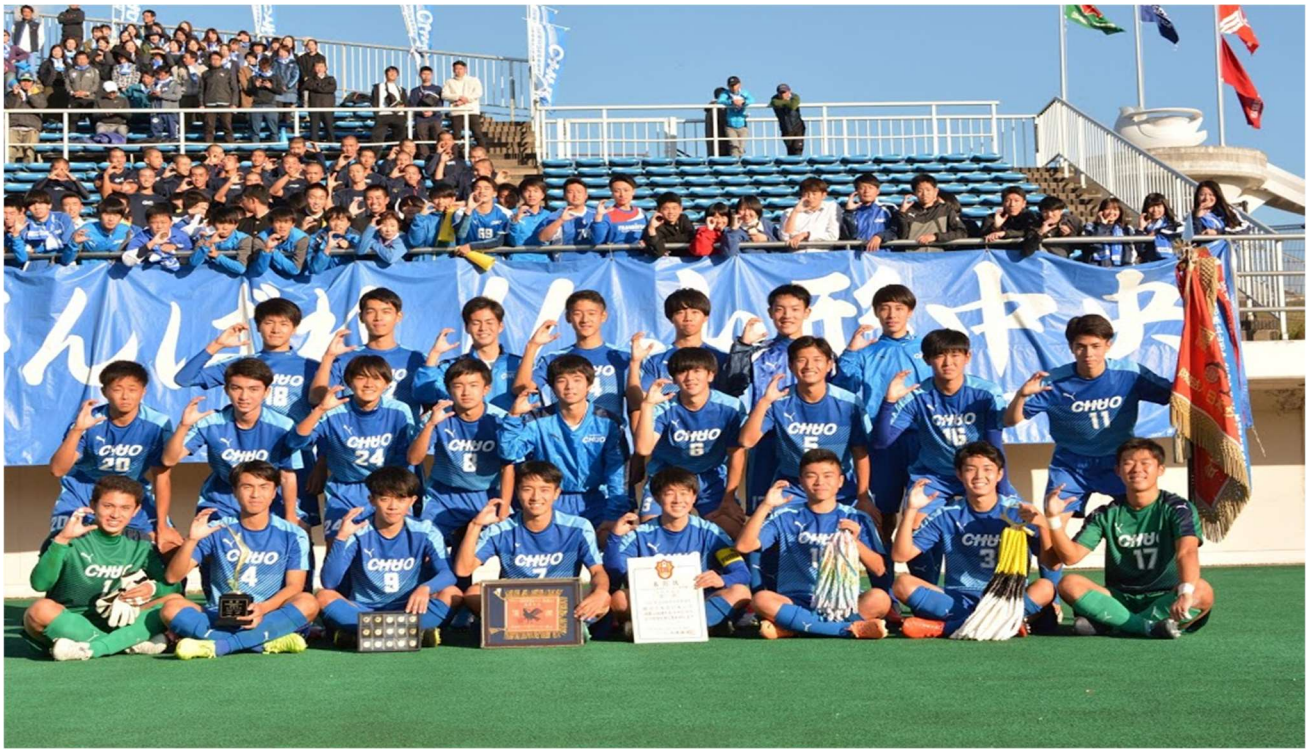
# 山形中央高校校　校歌②




校歌の価値は、在校生と卒業生、学校関係者の方々が一体となり「心を一つにできる」ことにあります。先人の方々の思いや歌詞の意味を噛み締めながら、声高らかに歌いたいものです。

1 番の入りに「山の名はみどりの千歳」2 番の入りに「川の名は聖なる馬川」が出てきますが、自然に対する感謝と敬意を忘れてほしくないという願いが込められているように思います。自然に生かされている人間が地球環境を壊してはならないというメッセージではないでしょうか。校歌を通じて、「自然に生かされている」という感謝心を磨きなおしていきたいですね。3 番に「混沌の世界を望み君は船出する」という歌詞がありますが、そのためには「眉あげてここにきそって」が必要だと、ウィズ・コロナ時代を生きる私たちへの激励に聞こえます。成長を求めたきそいあいと、結果を求めたきそいあいは違います。致知 2020 年 12 月号（苦難にまさる教師なし）で、北里大学特別栄誉教授の大村智先生は『知足者富（足るを知る者は富む）　満足することを知る者は心豊かに暮らすことができる、という意味です。足るを知ることで心は穏やかに保たれ、一日の食事やなすべき仕事を与えられていることに感謝の念が湧いてきます。いろいろな困難に直面しても、「あれが欲しい、これが欲しい」と欲をかかないで小さなことにも満足していく心の習慣。ウィズ・コロナの時代に求められる 1 番のマインドはそれではないかと思います。』と述べています。勝ちたいという思いは誰よりも必要ですが、自分の欲に負けてはいけないということだと思います。自信、自尊心、傲慢は心理的に紙一重なのでしょう。心構えや考え方のバランスを取りながら、自分なりの知恵を働かせ、今の勝負の世界を生きていく必要があります。このバランスは私たち指導者が教えられない部分です。自分だけでなく仲間の成長も願った学校生活の中で、自分で気づくしかありません。それが「ここにきそって」の深い意味ではないでしょうか。山形中央高校は勝負に勝つのではなく、勝負の神様に愛され、勝利に呼ばれるという考え方です。今年は特に必要だと思います。生徒のみなさんに・・・というよりは、自分自身に言い聞かせています。県高校総体に向けて、私たちの校歌は中央生の力の出し方を教えてくれました！それぞれの目標の舞台に呼ばれることを祈り、№31 の翔友

にある遠藤淳一先生の「スポーツが見せる風景」（過去のサッカー部インターハイ県予選での素晴らしい話）を紹介し、激励に代えさせて頂きます!!

『・・・ついにこの大一番は前半後半、さらに延長戦を終えても０－０、いよいよＰＫ戦でしか決着をつけられないという試合になった。ＰＫ戦の先攻は相手チーム。互いに一人目が決め、二人目も決めた。先攻と後攻でどちらにより重圧がかかるのか。先攻の選手が決めれば後攻の選手にプレッシャーがかかる。でも、先攻の選手も決して外すわけにはいかないから当然プレッシャーは一緒か。そんなことを考えながら見ている間にＰＫ戦は５－５になり、６人目からはサドンデス（どちらか一方が外した時点で終了）を迎える状況になっていた。サドンデスとは恐ろしい言葉を付けたものだといつも思うが、敗者にとっては正に Sudden Death であり、勝負とは本当に厳しいものだと思わされる。ボールをセットして蹴るまでの息を飲む静けさ、ゴールを決めた瞬間の歓声、両チームともにそれが幾度か繰り返された。ついにＰＫ戦は９－９。それでもまだ決着がつかないのである。どちらも譲らない。３年間鍛錬してきた意地と意地、練習で培ったプライドが心に隙を与えない。１０人目、相手チームの選手がボールを蹴った。ボールはゴールバーの上を通り過ぎた。鈍く何か重いものが崩れたような落胆の声が聞こえた。外した選手は下を向き戻ってきた。そして泣き崩れた。山形中央の１０人目がボールをセットした。スタジアムのすべての目が注がれる中で、ボールがネットを突き刺した。歓声が沸く。興奮した叫び声が轟く。安堵の気持ちと選手達に拍手を送りたい気持ちで、ネット越しに山形中央の選手達を目で追った。極度の緊張感から解放され、それぞれに喜びを分かち合っていた。そしてその後、山形中央の何人かがフィールド内で誰かに歩み寄っていった。声をかけている。よく見ると、まだ立ち上がれない相手チームの１０人目の選手だった。この光景を見た瞬間に、何か熱いものが自分の体内を巡るのを感じた。サッカーが好きで、一心にその頂点を目指してきた者達。彼らにしかできなかったこの試合とこの内容。そして最後の幕切れとそのあとの風景。スポーツという素晴らしいものに巡り会い、それを追求することが許されている体育科の君たち。勝ち切ることは険しく厳しい坂道を登るようなもの。先輩達はそのために自分を限界まで追い込んできた。その苦しさがわかるからこそ、人の辛さや苦しみがわかる人たちであった。険しい坂道を登りつめ、頂点に立った人にしか見えない風景がある。これからの君たちにも是非、限界を乗り越えた者にしか見えない、未だ見ぬすばらしい風景を見られる選手になってほしい。』